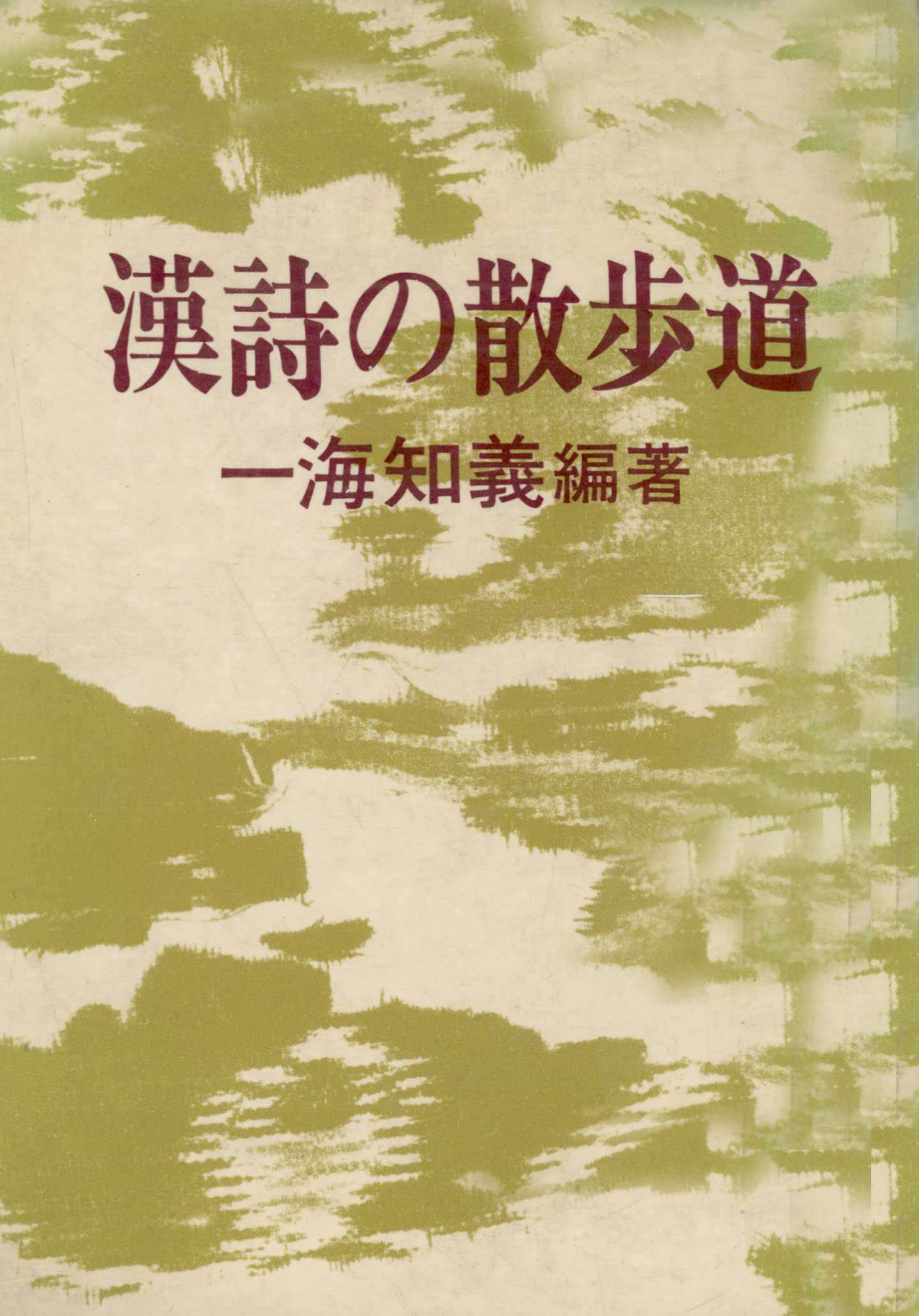


漢詩の散歩道

一海知義編著



漢詩の散歩道

一海知義編著

一海知義

1929年生。京都大学文学部卒。神戸大学教授。

主な著訳書『陶淵明』（岩波書店）『陸游』（岩波書店）『史記』（筑摩書房）

漢詩の散歩道

1974年10月31日 第1刷© 〈検印廃止〉

定価はカバー・スリップに表示してあります。

編著者 一 海 知 義

発行者 竹 下 伝 吉

発行所 株式会社 日 中 出 版

東京都千代田区西神田1丁目3番6号 三崎町ビル

東京都千代田区猿樂町1丁目3番6号 大平舎ビル

☎ 03 (292) 8721 振替東京 186748

印刷所 鎌倉印刷株式会社

- ・ 本社の本が書店にないときも本社にありますから、書店に取寄せてくれるようご注文下さい。10日間くらいで入手できます。
- ・ 直接送金下されば至急送本申し上げます。

序にかえて

四年前の秋、神戸のまちにささやかなサークルが誕生した。中国文学同好会という。集ったのは、商店主、会社員、セールスマン、教員、主婦、看護婦、学生など、どこかのまちにもいる人びとだった。彼らは毎月一回、講師をよんで中国文学の話を書く会を開いた。私たち、主として関西に住む中国文学研究者数名が、その講師をつとめた。

あのころ、日中両国の復交は、まだそのきざしさえみせていなかった。しかしいわゆる中国ブームの前兆がなかったわけではない。講師をふくめて、会員たちは、両国の復交を心から望んでいた。そのための運動に参加することのほかに、中国への理解を深く静かにつかみなおしてゆくこと、それがサークルの目的であった。文学という一見迂遠な方法を選んだのは、好みということとは別に、そのためでもあった。

やがて国交回復が急速に政治の日程にのぼり、いわゆるブームが高潮に達したころ、いくつかの新聞社がサークルへ取材に来了。その一つ、A紙は次のように報じている。

「世をあげて日中友好ブーム。そんななかで、コッコツと中国文学の研究を重ねているグループがある。二年前、十人でスタートしたが、今では会員が四十人に。へ中国を真に理解するには、

まず中国のすぐれた文学を見直すことから」とせよと読書会に励んでいる」。

サークルは、テキストの輪読をはじめようになり、復交後の今も地道につづけられている。さて、二年前の秋も深まったころ、日中友好新聞の編集部から、サークルの講師の一人である私に連絡があった。サークルでの中国古典詩に関する話を新聞に連載してくれないか、という依頼であった。古典詩にあまりなじみのない読者にも、わかりやすく、という注文がついていた。私はサークルの講師や友人で中国古典詩を専攻している何人かに相談し、彼らもやがて執筆してくれそうなので、とりあえずひきうけることにした。連載のタイトルは、編集部と打ち合わせ、どちらからともなく、「漢詩の散歩道」ときまった。いわゆる漢詩の世界を、気ままに散歩してみよう、というのである。

連載は、七三年の元旦からはじまった。本書の冒頭にのせた魯迅の詩が、連載第一号である。この新聞は週刊であり、最初は隔週ということではじめた。秋ごろになって、編集部の要望もあり、毎週連載することにした。執筆者ははじめ私一人だったが、第六回から入谷仙介（島根大学教授）、第十三回からは寛文生（立命館大学助教授）の両氏が、加わってくれた。そして、七四年に入ってから、寛久美子（神戸大学助教授）、松村昂（名古屋大学講師）、大芝孝（神戸市外国語大学教授）の三氏が加わり、計六名でかわるがわる執筆する、ということになった。

月日のたつのは、はやいものである。この秋で、連載も七十回を越えた。連載そのものはつづ

3 序にかえて

けるが、このあたりで一つのくぎりをつけ、一冊の本にまとめてはどうか、という注文が、また編集部からあった。気の弱い私は、これもひきうけてしまった。

本になるだろうか。なるだろう、と私が思ったのは、秩序だった道すじのまるでない散歩の足あと、それらをながめわたしてみて、これは第四章に分けられる、と気づいたからである。第一章には、四季の詩をおく。冬の詩がないが、これは第一冊目だということで、らんぼうだけれども、読者にがまんしてもらう。さいごの第四章には、中国人以外の、といってもベトナム人と日本人だが、その作品をおこう。そしてのこったもの、これは時代順にならば、第二章を古代から唐代まで、第三章は宋代から清朝まで、としよう。

本書の章分けは、右の原則にしたがうことにした。読者にはどの章から散歩をはじめてもらってもよい、というわけである。なお書物に編むにあたって、もとの原稿に若干の修正を加えるとともに、各執筆者が別の紙誌に書いた数篇を、本書の中にくみ入れた。各篇の末尾には、執筆者の略名を表示した。

さて、私たちはふつう中国の古典詩のことを、漢詩とよんでいる。しかし漢詩は「中国の」、「古典」詩とはかぎらない。本書の第四章に収めた作品のように、中国以外の、たとえば日本、あるいはベトナムの、しかも「現代」人が作っても、ちゃんと法則にかなってさえいけば、「漢詩」である。むしろこの「法則にかなって」いることの方が問題なのである。漢字を五字、ある

いは七字ならべて、これを四行、あるいは八行つらねても、法則になつていなければ、嚴密な意味では漢詩とはいえない。本書にものせた日本の宰相の「一首」(二一八ページ)は、その例である。一句の中に中国古典語にない単語が混入しても、それは許容される。しかし全体が中国古典語の語法、文法になつていなければいけない。また中国古典詩には、その類型ごとに、脚韻きやくいん、平仄ひようそく、対句たいくなどに関するいくつかの約束ごとがある。それにもしたがわなければならぬ。これらのことについて、本書はその性格上、あまりふれなかった。くわしく知りたい方は、すで出版されている解りやすくしかも水準の高い入門書、たとえば岩波版中国詩人選集『唐詩概説』などに、拠つていただきたい。

本書の目的は、気ままな散歩にある。散歩の精神は、発見の精神でもある。執筆者たちは、たがいにゆるやかな連絡はとりながらも、それぞれ自由に詩人を選び、作品を選んだ。日本人によく知られている詩人、作品もないではないが、結果としては、あまり知られていない詩人や作品が多くなった。知らない道にもふみこむ、それが散歩の趣旨になつてゐる、と考えたからである。一方、気ままな散歩、とはいふものの、制約がないわけではなかった。連載一回分の字数の制限から、長篇の詩をとりあげることができなかった。ほとんど小道ばかりを歩き、大道を濶歩することがなかった。ただし、その制約の中でも、いささかの工夫はしてみた。

漢詩の歴史は長い。本書第二章のはじめにのせた「碩鼠せきそ」、この作品をふくむ中国最古の詩集

5 序にかえて

『詩経』には、紀元前十二世紀の詩が収められている。以来現代に至るまで、約三千年。作品を生んだ空間もまた広い。あの広大な中国本土だけでなく、ベトナム、朝鮮、日本などを、それはふくむ。本書の目次を一覧すれば、作品群がかなり多岐にわたっているように見えるが、それらは漢詩の散歩道の豊富な多様さと奥行きの高さから考えれば、まだほんの入口に足をふみ入れたにすぎない。しかしそのほんの入口から、すでに過去の中国の民衆の声が、またその声を反映した歌が聞こえて来る。

散歩はまだつづけるつもりだけでも、ここでひとくぎり、この道とともに歩まれた読者の叱正を、私たちは待っている。

一九七四年秋

一海知義

目次

序にかえて……………1

I

二十二年元旦……………	魯迅	10
爆竹……………	王安石	12
古稀……………	陸游	15
春晴……………	陸游	18
落梅……………	陸游	22
踏青……………	蘇軾	24
五十少進士……………	孟郊	28
考試畢りて銓樓に登る……………	梅堯臣	31
岸边に手を洗う……………	高啓	33
春曉……………	孟浩然	36

II

早に朝す……………	王維	38
薔薇……………	李白	41
蝶ととんぼ……………	杜甫	44
夏昼偶作……………	柳宗元	48
暑旱苦熱……………	王令	51
六月無長江……………	楊万里	54
夏日田園雜興……………	范成大	58
蓮池……………	范成大	60
シラミの歌……………	梅堯臣	62
病蟬……………	賈島	65
耳聾う……………	杜甫	68
菊枕……………	陸游	71
碩鼠……………	詩經	76

7 目 次

日東の病僧	項 斯	116
山雨欲来風滿楼	許 渾	113
ただ若き日を惜しめ	杜秋娘	111
天は度るべし	白居易	108
自由	杜 甫	105
楊貴妃	杜 甫	103
碧山に尽く	李 白	101
牀を遶る	李 白	98
白鷺	王 維	95
野外人事まれなり	陶淵明	91
歲月不待人	陶淵明	88
城中好高髻	後漢歌謡	86
悲歌	烏孫公主	83
兄弟二人不能相容	前漢歌謡	81
垓下の歌	項 羽	79

書物を焼く	章 碣	119
山中の寡婦	杜荀鶴	121
百姓の歌	聶夷中	124
橡媪の嘆	皮日休	127
繡龜形詩	侯 氏	131
答諸姉妹戒飲	蔣 氏	134
二人の女	寒 山	137
瓦を焼く	梅堯臣	142
進士と茶	梅堯臣	144
貧家一碗灯	陳 烈	147
久閑棋格長	陸 游	150
碁会所	陸 游	153
猫の詩	黃庭堅 陸游	156

III

詩情と窮途……………	陸 游	159
耕牛は皮を剥がれて戦		
具と作る……………	劉 基	162
兵を銷かして農器を鑄		
る……………	陶 凱	165
貧女吟……………	俞汝舟の妻	169
ある乞食の意地……………	無名氏	172
ただ馬の嘶くを聴きて		
まず市をやむ……………	瞿式耜	174
乞食の歌……………	錢澄之	177
漫感……………	龔自珍	181
風雷を待む……………	龔自珍	183
アヘン戦争時期の歌……………	清末歌謡	186
花を種える……………	魏 源	189
神州陸沈……………	康有為	194

IV

老夫原不愛吟詩……………	ホー・チ・ミン	198
「獄中日記」の朝……………	ホー・チ・ミン	202
ベトナムの詠詩……………	スアン・トイ	204
家に猫と鼠あり……………	良 寛	207
良寛と王梵志……………		209
日清戦中帰国の詩……………	山県有朋	212
幸徳秋水と陸游……………		214
獄中の詩……………	幸徳秋水	216
一見「漢詩」風……………	田中角栄	218
俳句の漢訳……………		220

I



二十二年元旦

魯迅

魯迅（一八八一—一九三六）の元旦の詩を一首。題して、二十二年元旦。

民国二十二年といえ、一九三三年（昭和八年）。その前年の一月には、日本軍陸戦隊の挑発による「上海事変」がおこり、三月にはいわゆる「満洲国」が独立を宣言。日本では、青年将校が犬養首相を射殺した「五・一五事件」がおこっている。

当時、蒋介石の軍隊は江西省の名勝廬山（ろざん）に総司令部をおき、「共匪」一掃と称して罪のない人民を空から地上から攻撃、殺りくをくりかえしていた。

こういう状況の中で、魯迅は、そして中国は、どんな正月をむかえたか。

雲は高き岫（みね）をとざして 將軍を護り

霆（いかずち）は寒村を撃ちて 下民を滅ぼす

到底 租界の好ろしきに如かず
牌パイを打つ声のうちに また新春

第一句、蒋介石をはじめ国民党反動派の將軍たちは、たちこめる雲に守られて、廬山の山上に君臨する。

第二句の 霆いかずち、それは爆撃機か戦闘機にちがいない。命令一下、貧しい村々は爆撃をうけて、人民の命がつぎつぎとうばわれてゆく。

そして第三句と第四句。一方、眼を転ずれば、ここは大都會上海シャンハイの租界。国民党のおえら方は外国軍隊に守られた租界の中で、徹夜のマージャン。一夜あければ、またまためでたい元旦。

到底租界の好ろしきに如かず——やっぱり租界が一番ですな。

この皮肉のうらに、魯迅の鋭い痛みと怒りがこめられている。

「霆」を「公害」に、「租界」を「赤坂」あたりの夜の料亭に読みかえてみるのも、また一興。

(知)

雲封高岫護將軍

霆撃寒村滅下民

到底不如租界好
打牌声裏又新春

爆竹

王安石

爆竹の声中 一歳を除く

春風 暖を送りて 屠蘇とそに入る

千門万户 瞳瞳ととの日

総すべて新桃を把とりて 旧符に換かう

パチパチ、パン、パン！ 爆竹の音がする。一年が過ぎた。春風がのどかな暖かさを運んでくる。その新春の屠蘇を飲んで厄払い。どこかしこの家でも、初日のかがやく元旦、表門の桃符を新しいのにとりかえて、新春を迎える。

宋代のお正月風景である。屠蘇のように、中国ではとくにほろんで、日本に残っているもの、桃符のように、春联に変身したものなど、古い習俗がリアルにうたわれている。

爆竹も、後世は火薬紙になったが、古い当初は、文字通り竹をもやした。そのすさまじい炸裂音、厄神の耳をつんざき、恐れおののかせ、退散させるのに役立つと考えたのは、いかにも古代人にふさわしい。

第二句「春風暖を送りて屠蘇に入る」とは、春風が暖かい空気をお屠蘇のなかに吹きこむこと、つまりお屠蘇を飲んだら身体の中がぽかぽかと暖まり、春が来たぞという実感をもつことをいうのであろう。なお屠蘇の語源、「蘇」という名の悪鬼を「屠^{ほふ}」る意とか、「屠」は鬼気を屠絶し、「蘇」は人魂を蘇醒す、から出たとか、またこの酒を調合した男の草庵名から出たとか伝えられて、真実は不詳。『清俗紀聞』によると、江南・浙江は絶えて用いる者なし、しかれども、土地によりては製す、とあり、清代は衰微の傾向、そして、民国では、福建に残存する東陽酒がふさわしい旨、『支那民俗誌』に載っている程度。日本でも、最近はあまり行なわれなくなりつつある。が、九世紀嵯峨天皇の弘仁二年（八一）はじめて宮中で用いられたといい、この習俗の衰微は惜しまれる。子規の句に、

屠蘇かけて見ばや枯木の梅の枝

第三句の瞳^{まなこ}は、太陽が東の空に昇ってくるときの輝きを形容する語。千門万戸が初日の出を

迎える朝、人びとは厄除の桃符をつけかえておくのである。桃符は、桃板ともいうように、桃の木で作った二枚の板を門の両脇にかけ、またそれに門神の像を画いて、厄除のまじないとしたもの。隠元いんげん創建の宇治黄檗山万福寺には、いくつもの桃符が保存されている。桃が悪鬼のいやがるものとしてふるくから魔よけに使われていたことは、『礼記』や『春秋左氏伝』などの書物にすでに見えている。

神宗の信任を得て、一〇七〇年、宰相となった宋の王安石（一〇二一—一〇八六）は、有名な新法、新しい政治を断行する。この詩、正月にすべての古いものが新しいものにとりかえられるときの習俗情況をリアルに描写しており、それを比喩として、自分自身の抱負を述懐したもの、と解することができる。

（孝）

元 日

爆竹声中一歲除
 春風送暖入屠蘇
 千門萬戶曠曠日
 總把新桃換旧符